

# 過去の【今月のコラム】

2019年12月

日本は自然災害の多い国だといわれています。先日全国研修会の行われた熊本県でも3年前に大きな地震がありました。近年は台風などによる豪雨災害も増えている印象です。



私の住んでいる長野県は、高い山々に囲まれていて、台風被害が少ない県で、それがこの頃はネットでも話題になる位だったので、私たち自身台風接近のニュースを見るたびに「またお山が守ってくれるよね」などと言いうほどでした。それが見事に裏切られたのが今年の台風19号です。生まれて初めて避難所で一晩を過ごしました。友人から次々に「(私の住む地区)で千曲川が氾濫って全国ネットのニュースでやってるけど大丈夫?」などというメールが届いたり、緊急エリアメールが頻繁に鳴ったり(人口密度が高くなっている場所でみんなの携帯が一斉に鳴るのは、聴覚過敏がなくともかなり不快でした)で不安な一晩でした。幸いなことに我が家には被害がなかったのですが、次第に明らかになる被害状況にはことばを失いました。

勤務している病院(医療型障害児入所施設)も、初めて1階の病棟の患者さんを2階に避難させました。幸いこちらも被害はなく、近隣の地区では浸水被害があつたり通行止めの道路があつたりする中、連休明けには通常通り業務を行うことができました。STに来てくれた患者さんやご家族とは、まずは無事を確認しあい、どんな風に過ごしたかを伺いました。多く聞かれたのは、「この子を連れて避難所には行かれなかつた」という声です。理由は大きく分けて2種類あって、一つは「周りの人に迷惑をかけそう。親も子もつらい思いをしそう。」というもので、体は元気だけれど、過敏があつたり、こだわりがあつたりする子たちのご家族から聞かれました。もう一つは「安全に過ごせるか不安。何を準備したら十分かわからない。」というもので、医療的ケアが必要だったり、常食の摂取が困難だったりする子たちのご家族から聞かれました。結果として避難をしなくても大丈夫だった、というご家庭が大半ではあったのですが、いつどこで大きな災害が起きてもおかしくない日本ですので、これを機に“必要時にはきちんと避難ができるよう、日ごろから準備をしておこう”という話をしました。“準備”は、避難先の確保であつたり食料やケア用品の確保であつたり、その子によって違いはありますが、STが力になれる部分もありますので、日常的に話題にして一緒に考えていくのが良いと思います。

…これまで、日本で大きな災害がおこった時には、特に常食の摂取が困難なお子様のご家族には「避難することを想定してこの子の食べられるレトルト食品などを準備しておきましょう」という話はしてきていたんですけどね。私もご家族もどこか他人事だったなあと思います。今回、実際に体験したことで必要性を痛感しました。このコラムをお読みくださった皆さんの中にも、災害はよそでおこる、という感覚の方がいらっしゃるかもしれませんね。違いますよ!次はあなたのところかもしれません。そしてそれは、明日かも。そうなったときに慌てないよう、ご自分、そして患者さんの“準備”をしておきましょう。

備えあれば憂いなし！！

2019年12月 子どもSTの会 運営委員

## 2019年10・11月

11月23日(土)～23日(日)に、本会が年に1度行っている、全国研修会が熊本県宇土市にて開催されました。

10月と11月のコラムは、研修会前と言うことで研修会実行委員長からの挨拶文を掲載しました。

なお、研修会の様子は後日子どもSTの会のHPでも紹介する予定です。



### 《ごあいさつ》

熊本地震から3年半、残された地震の爪痕の多くは、今もなお復興の最中にあります。熊本には雄大で美しい数々の景勝の地、建造物がありますが、地震により崩壊してしまい、姿を留めない形になってしまったものや、寸断されたままの道路や線路がまだ残されており、それらを元のように取り戻すには、これからさらに時を必要としています。

それでも時間をかけて少しずつ、以前と同じ姿ではないかもしれません、さらに強く美しく、新たに充実した建物などが、街のあちこちに見かけられるようになりました。熊本は、地震によって沢山のものを失いましたが、多くの人々の力を得て、日々復興を成しているところです。来熊していただいた参加者の皆様方には、熊本の今の姿を堪能していただきつつ、美味しい水や空気、郷土の食べ物を味わっていただけたら幸いです。

このたびの研修会のテーマ、「当事者や家族の気持ちに寄り添うSTを目指して～今私たちにできること～」は、各分野に精通した講師の先生方の思いのこもったメッセージと、日々の繰り返しの中では知ることの難しい、当事者や、親や、きょうだいの溢れんばかりの生の声を、参加された皆様方にお届けしたいという思いから生まれました。そして一人一人がことばやコミュニケーションの専門家として、子ども達やその家族の幸せな人生を描き、実現するためには今何をすべきなのかを考え、寄り添い手助けすることの大切さを考えるきっかけとしていただきたい、そのような願いを込めてこの研修会を準備いたしました。

熊本の小さな宇土市から全国に向けて、子どもの発達支援を考えるSTの会2019熊本研修会in宇土の開催をきっかけに、私たち子どもSTが、ことばやコミュニケーションに不安や困難を抱く子ども達や、その家族に求められる職種となり、知識や技術を駆使して助けることのできる専門職となるよう、その礎の一端として發

信していけることを祈念し、ごあいさつとさせていただきます。

2019年10月 熊本研修会実行委員長

## 2019年9月

私の職場は、児童発達支援・放課後等デイサービスです。

このコラムの原稿を書いているのは、夏休み真っ最中で、毎日朝から子どもたちが元気にやってきています。

今の職場でSTとして働くことは、

ことばを、実生活のコミュニケーションの中で使いこなしていけるよう支援するために、

未就学時期から高校卒業まで長く係われるという点と、

生活の場で係われるという点で、

とってもいい環境だなあ、と思っています。

現在、学齢以降のお子さんには、個別にSTの時間は設定せず、放課後デイでみんなと同じスケジュールで生活する中で、必要に応じて係わっています。

個別に比べ、じっくりゆったり係わる時間や場所を確保するのが難しいですが、学校の宿題をしたり、食事をするなどの実際の生活場面と一緒にいることで、普段どんな風に行動したり、周囲とコミュニケーションを取っているのか、学校やおうちに近い場面の様子を見ることができます。

特に夏休みなどは、デイで過ごす時間が朝から夕方まで1日と長いので、

子ども同士で喧嘩をするなど、毎日何かしら事件が起きてます（笑）

そして、実際、働いてみて感じているのは、

職場のスタッフとの協同のおかげで、実現していることがたくさんあるなあ、ということです。

同じ場を共有する中で、

私の思いや考えを理解して、同じように子どもたちに接してくれるスタッフ、

私が大人げなく正論を押し通して子どもと全面対決している時に、絶妙のタイミングで子どもの話を聞いて双方が納得いく落とし所を見つけてくれるスタッフ。

現場で起こる「事件」に日々直面し、スタッフみんなで対応していると、一人で個室で「クンレン」していたのではなし得ないことが実現できたりするので、みんなとのチームワークに毎日感謝しています。

まだまだひよっこ、と思って仕事をしているうちに、あっという間にもうすぐ20年になろうとしています  
が、また明日も頑張ろう、と思えるのは、

私たち大人を困らせたりもしつつ、

時に予想もしない面白い反応を返してくれる子どもたちとの係わりは

もちろんですが、気持ちを一つにして一緒に働くスタッフや、

私の思いや考えをご理解くださる保護者の方々など、

人との気持ちのつながりのおかげだなあ、と、改めて思っています。



2019年9月 子どもSTの会 運営委員

## 2019年8月

むかしむかし、あるところに、背の高い幼稚園児がいました。幼稚園に行くのが大好きで、運動会をとても楽しみにしていました。運動会には、お母さんが見に来てくれます。

運動会の日になりました。張り切って徒競走に出ました!頑張りましたが、結果はビリでした。残念だったなど、思いました。

その日の夜、お母さんから「身体が大きくて背が高いのに、身体を持て余してへんな格好で、ゆっくり走るんだもの」と大笑いされました。

自分ではへんな格好とは思っていなかったので、とてもびっくりしました。そして、お母さんに笑われた事が、とても悲しかったのでした。

それからかなりの年月が経ち、幼稚園児は大人になりましたが、このことは、悲しい思い出として、時々思い出したそうです。

幼稚園の時には分からなかったけれど、大人になって思い返すと、運動会が終わってからお母さんに「よく走ったね」と、走りきったことを認めて貰えなかつたことが悲しかったのだと思ったそうです。

お母さんには言って貰えなかつたそうですが、大人になってから思い出した時に「よく走ったね、幼稚園の自分」と、自分で自分に話しかけて過ごしていたら、この事をあまり思い出さなくなつたそうです。

めでたし、めでたし。

どんとはれ※



これは、私の小さいころの出来ごとです。半世紀前のことになつてしまひましたが、鮮明に覚えていて、小さかつた私にかなりの衝撃を与えた母のことばと反応でした。

運動音痴への気づきは、この時が始まりでした。運動の苦手意識(発達性協調運動障害と他にも特性色々!!と自己診断!)は学校に上がってから、更に強まり、運動会の前には、寝る前に「学校が火事になって(雨だと延期になるので)、運動会がなくなりますように」と、神様に必死に真剣にお祈りしていましたが、願いが聞かれる事は有りませんでした(笑)。中高での球技大会は、拷問でした(苦笑)。今となつては、笑い話ですが。

あのとき、母に「走ったね」と一言、言って欲しかったなあと思います。幼稚園児の時は、ただ母に言われた事が、悲しくて辛かつただけでしたが、大人になるにつれて思い返すと、下手でも認めて欲しかったのだと今更ながら思います。

運動が苦手な事は今も変わりはないのですが、現在は、運動会や徒競争も無く、他の方に迷惑が掛からず、かつ、自分が身体を動かすと気持ちが良いと思える程度の運動(ストレッチや万年初心者の太極拳等)を楽しめるようになり、やっと、運動が楽しいと感じられるようになりました。下手でも楽しめる運動に、大人になって出会えたことがとても嬉しいと思いつつも、金曜夜はビールを飲みたいのをちょっと堪えて、いそいそと太極拳に通っています。おしまい

※どんとはれ・・・「めでたしめでたし」 岩手の方言で物語の最後に締めくくる言葉

2019年8月 子どもSTの会 副代表・総務

【不確実さを不確実なまま受け止めながら希望を見出す知恵】

大学教員として対人援助職の養成に携わりながら、発達相談をライフワークと決め、月に何度かは現場に向いている。養成と現場との間にある矛盾や溝をどうしたら埋められるのか、自分の体を使って考えることだけはやめないようにしている。

ある坊やが母親と一緒に部屋に入ってきた。保健師との事前カンファレンスの情報も踏まえて、子どもの姿をイメージしながら、いつも持ち歩いている七つ道具の中から選び抜いた玩具を、試行錯誤しながらセッティングする。「さりげなく」である。押し付けではなく、子どもが能動的かつ主体的に環境に働きかけることの発達的意味を私は保育から学んだ。相談には1時間～2時間はかける。流れや展開を想像しながら準備を終え、親子を迎える。両手を広げてさあおいで、ではない、私の場合は。わざと玩具をいじっているふりをして、ちょっと遅れて、ああどうも、というようなタイミングでちらっと親子の姿を見ながら、そこで初めて正面から迎え入れることも多い。人間と人間が初めて出会うということは、少なからずそこに緊張関係が生まれる。互いの緊張を和らげるために、ダイレクト過ぎない接触を心がける。竹内敏晴氏の言葉に示唆を得つつ、声とは他者に触れる行為だと考えれば、親子によってはあまりダイレクトではないほうがいいこともある。なるべく、発声時にお腹のあたりを意識し、喉より上にあまり力を入れず、自然とほわんと響かせるような声を意識する。これが私の場合はその日の調子のバロメーター。調子が悪いと、やたら頬の筋肉が疲れる。言葉も宙をさまよい、相手に染み入っていかない。きょうだいが一緒に来た場合も、極力一緒に部屋に入ってもらうことにしている。できるだけ、親子の日常を体で感じるためである。

坊やはセッティングしておいた玩具には目もくれず、私の顔を見る事もなく窓際に飾ってあった人形へと向かった。それだけである。行動Aは行動Aであると受け止めることが、行動Aが解釈Aと結びつくことよりも先である。そんな当たり前のことがなかなか難しい（のかもしれない）。坊やは私に背を向けたまま、それでも用意していたトラックの玩具をいじり始めた。ここでも行動Bは行動Bのまま。積み荷である立方体の積み木をトラックに載せたいらしい。ここで、初めて動く私。積み木をトラックの荷台にすとんと下ろす。その瞬間、坊やはトラックを動かし逃げていく。あ、ははは。よしもう1回。ストン、あれ。逃げ行くトラック。あ、はっはっは！私は結局荷台に積み木を載せられない。待って～！あ、ははは！やりとりAとでも名付けてみる。行動A→行動B→やりとりA。やがて、お魚が好きな坊やは私が用意した青い布の川上から流れてくる魚を期待していたが、ようし、ここは。かばちゃを流す私。お次はにんじん。そしてきゅうり。あれれ～？ははは！期待を裏切るやりとりB。へへへ、さっき私をもてあそんだやりとりAの仕返しだ あ。そこからは、釣った魚で豪華なディナーのままごと遊び。「ねえねえ、みてみて！」「ねえねえ、食べて！」入室時からはずいぶん様変わりした言葉でのアピール、行動C。カエルも大好きな坊やは、最後に私とぴょんぴょんガエルの玩具で対決、やりとりC。最後は抱っこでさようなら、やりとりD。

聞けばこの坊や、園ではマイペース、わがまま、親育てが必要と言われ、おまけに吃音もある。行動A→行動B→やりとりA→やりとりB→行動C→やりとりC→やりとりD、粗っぽい振り返りだが、一連の流れを見ていた母親が行動Cの場面で「この子がままごとなんてするんだなあ。初めて見た」最初はなんとなく受け止めていたその言葉だったが、帰り際に母親はもう一度「この子が初めて会った人とままごとをするなんて…」まだ小さい弟もいるし、おそらく家では大好きな車で一人遊びの場面も多いのだろう。それにしても、お母さん、

鋭い。そこ、見てるんだね。「親育て」が必要な母親だろうか、本当に。ぴょんぴょんガエルで真剣勝負のやりとりCでは、指の立て方を何度も何度も工夫しながら誰の助けも借りずに、ルール通りに夢中での的を狙う坊や。本当にマイペースでわがままなのだろうか。「手は出してないよ、先生。でもね、イライラしちゃうんだ」母親がふとした瞬間にもらす。そんな言いにくいこと、初めて会った私に言ってくれるんだね。本当に目の前にいるこのお母さんは親育てが必要な親だろうか。再び思う。

「相談がそのままセラピーであるように」を心がけている。もし私が行動Aや行動Bの段階で、解釈Aや解釈Bを急ぎ、介入Aを慌てていたら、やり取りA、B、C、Dも別のものに変わっていたろう。遊びは二度と再現できないものであるから、おもしろい。そう考えないセラピストもいるかもしれない。再現できることが科学であると考えれば、解釈Aや解釈Bを最短で導けることが優先されるであろうし、治療とはそういうものかもしれない。しかし、解釈Aや解釈Bを急いで後に待っているのはたいていプログラムAやプログラムBであろう。先ほど、やり取りA～Dと述べたが最初からこれらが予測されたわけでもなく、本来やり取りは∞のはずで、たまたま子どもの主体性・能動性と（人的・物理的）環境の交点にやり取りA～Dが生じただけということである。プログラムを立案できることもセラピストの大切な力量だと思う。それ自体に異論はない。ただし、∞である子どものとのやり取りの可能性を「はじめから」プログラムAに限定してしまうことは、何か大切なものを受け止め損なう危険性もはらんでいるという慎重さも持っておきたい。「邪魔をしない」ことは勇気と覚悟がいるが、子どもの「表現」を見出す大切なプロセスもある。事実、母親は目にしたこともない我が子のおままごと遊びを見て、子育てに少しばかりの希望とエネルギーを見出した（ように見えるだけかもしれないが…）。言語・コミュニケーション支援とは、「その人らしさが最もよく表現されるような関係性の調整である」とも言えるかもしれない。たった1～2時間の出来事。されど、である。

確かに行動Aをそのまま行動Aとして受け止めるには、勇気がいる。なんだかよくわからないことが人間は一番不安であるから。大学教員として学生にかかわる中で、はじめて極めて優秀ではあるが、「不確実さ」に耐えられない学生に出会うことがある。結果や結論を急ごうとする。それはそれでよいし、探求心は十分評価に値する。ただし、対人援助のプロになっていく学生であるから、それだけでは何かが足りない。目の前の子どもに、ある行動特徴が見られることは、それ自体がプラスでもマイナスでもなく、それらの集合体としての人間と環境がどのような関係性を結ぼうとしているのかを理解しようとすることの中に、援助的であるということの本質があるのだと思う。そのような気持ちを維持するためには、おそらく「一人」では難しい。いつまで続くかわからない「不確実なまま」の時間と向き合うプロセスもあるから。結局私たち、対人援助職と呼ばれる人間にも、否定せずに、しかしながら「もう一つの」見方も示してくれる、あたたかな人の「つながり」が不可欠である。共に学び合う学生たちの中にも、そのつながりをどうしたら形成することができるのだろうか。少子化時代の学生であるから、現場に出ても同世代の仲間関係は限られている。人手も足りないから、労働環境も「不確実さ」だらけであろう。そうであっても、つながりの中から「もう一つの」見方や選択肢、つまりは希望を見出すという知恵の尊さをどうしたら感じてもらえるのか、そんなことを最近いつも考えている。養成と現場との間にある矛盾や溝の一つは　ここではないか、と思っている。

実は、子どもSTの会はそんな私にとって欠かすことのできない、大切な「つながり」の一つである。

2019年6月分は、都合によりお休みさせていただきました。

## 2019年5月

学生時代、何気なく学習した「発達の最近接領域」という言葉。

子どもに成長に寄り添う立場にあるお仕事をしている方は、それぞれに違う「発達の最近接領域」を是非とも見つめてほしい。

それが少しでもわかるようになったなら、「子どもが伸びない」という悩みが今よりも小さくなることは間違いない。

私がいる病院に親子が来るのは、せいぜい月に一度か二度、一時間あまりの限られた時間。

その時間でやれることは、やっぱり「育児の作戦会議」なんだと思う。

いわゆる「訓練」で時間を使うよりも、家庭に帰ってからのお土産を持たせてあげたい。

「子どもを真ん中にして家族が言葉を育める環境を用意する」ことが、子どもSTの腕の見せどころ。

どんな子でも、成長するための一歩は色々な方向があるもの。

その歩みを進める糸口を見つけるのが、私たちの「強み」ではないだろうか。

そう考えるようになって、相談に来る家族と過ごす一時間は、

自分にとっては頭の中が忙しく、それでいて楽しく思えるようになった。

ここに来ているのは母子だけかもしれない。

でも、家庭に戻ったらほかにも家族が待っているというケースばかり。

つまり、その子だけを見ないようにしなければならない。

目の前にいる子どもが成長する力ギは、兄弟姉妹に隠れていることも多々経験している。

そこまで視野を広げるのは大変かもしれないけど、育児は一対一で進む環境の方が圧倒的に少ないはず。

だからこそ、子どもを真ん中にして家族が言葉を育めるチャンスを広げるお手伝いを考えることへと、私たちの接し方は変わったのだと思う。

「来てよかった」、「ホッとした」、「家に帰って実践するのが楽しみになった」、接するごとに「変わった」瞬間を家族が感じると、毎日の育児がちょっとだけ変化する。

どんな家庭でも、「育児が大変」だけでは終わらないようにしたいもの。

そんな子育て・言葉育てをお手伝いするために、私たちはベストを尽くさなければならないのだと思う。

ただ、何年たっても判断に迷うこともある。

そんなときには、全国の精鋭たちにヘルプが出せる「子どもの発達支援を考えるSTの会」に相談事を投じるチャンス。

何とかなることがたくさんあるのが、この会に入って何よりも心強く感じ、また明日からも頑張れるはず。

2019年5月 子どもSTの会 役員・監事



## 2019年4月

おっぱいを飲みながらウトウトしている息子の姿を見て、「なんて幸せなんだろう」と嗜み締める。

1歳3ヶ月も過ぎたしいつ断乳しようか、卒乳まで待とうか、そんなことを考える日々。

二語文の理解もできているし初語はあるけどまだ歩かない。

ゆっくりでいいよ、そう思いながらも少しドキドキ。

私は未婚で息子を出産し、子どもSTのフリーランスとして北海道を中心にデイサービスや保育園でお仕事をさせていただいている。

「子育てに正解なんてない。親が子どものことを想ってこれでいい、と思えたらそれで良い。」

そう思えたのも今までにたくさんのお子さんや親御さんに子育てを垣間見させていただいたからだろう。

目の前のお子さんや親御さんと向き合うことが私を大きく成長させてくれた。

実は私はS T以外の事業もいくつか手掛けている。

しかし、どんな人生経験も子育ても全てがキャリアとなり精神的な自己成長が叶う、

そんな素敵なお仕事がどれほどあるだろうか。

「子どもが好きだから」だけではできないが、「やっぱり子どもが好き」じゃないと  
できない『志事』。子どもS Tだけは辞められない。



2019年4月 子どもSTの会 広報担当

## 2019年3月

先回のコラムで、運営委員が付けていたピンバッジについてお知らせしました。

今回は、子どもSTのシンボルである「カタツムリ」の由来です。

### カタツムリ

・・・ゆっくり進む ゆっくりでいいよ

### カタツムリの殻が丸くない

・・・中身で勝負

※カタツムリは単に、ナメクジが殻を背負っているわけではありません。

殻の中に重要な臓器を全部搭載しています。

### 4人の子はてんで勝手な方向に向いている：

・・・いろんな特性、いろんな興味、それでOK

一人ずつ異なる特性を生かして役割分担、ゆるやかな協力

### 子どもはみんな真剣

・・・子どもには子どもの理由がある

### カタツムリの「まなざし」

・・・乗っている子たちを見守っている



シンボルについてどのように感じられたでしょうか？

皆さまの「シンボルマーク愛」「子どもSTの会愛」が深まる助けになれば幸いです。

2019年3月 子どもSTの会 副代表・広報担当

2019年2月



本会は、代表を含めスタッフ全てが無償のボランティアで運営しています。運営スタッフは左のピンバッジを付けていますので、どこかの研修会などでこのバッジを見かけられたら気軽に声をかけてください。さて、このピンバッジの図柄、この会のトップページなどにも使われているいわば公式のデザインです。このイラストの中にも「子どもSTの会の思い」が込められています。皆さまはこのイラストからどんなことを感じますか？答えは次回のコラムで発表いたします。いろいろイメージしてみてください。

2019年2月 子どもSTの会 広報担当